

“新春二つの課題”

角戸 正夫*



いよいよ1980年代を迎えた。個人や世界が別に10年毎に変化するわけでもないが、どうもこの80年代は日本も世界も大きい曲り角に來たような気がしてならない。歴史的には極めて短期間の繁榮に過ぎなかったが、絢爛たる石油文明に早や警告が発せられ、一方で第三世界がその無気味な存在を誇示しつつ70年代が過ぎて行った。当面超大国はその繁榮を維持すべく最大の政治力を発揮しつつ新エネルギーの開発に全力を尽すであろうし、第三世界は超大国をぎりぎりまで利用しつつ持てる石油の残り火を焚き続けるであろう。とに角この80年代は先進国も途上国も人類をあげて正に知恵比べの時期である。

1950年代の破壊からの修復期、60年代の欧米との必死の競争からやっと70年代に先進国石油文明に仲間入りした日本にとって、わずか10年の繁榮にして赤ランプが灯ったことは実に不幸なことであった。しかしながら、「今後まだ石油はこの使用量でも数十年もつ」とか、この石油価額でも日本経済の力で十分吸収できる」とか愚痴や樂觀論もあり、また街には自動車やプラスチック製品が相変わらず氾濫し続けることであろうが、今度こそ政治も企業も科学も「またどこかで誰かがなんとかうまい手を産み出すだろう」では済まされないことを痛感すべきである。

貴重な石油や石炭・木材などは医薬品・食品その他より重要な化成品の原料として人類のため永く使用すべきであるし、また燃焼によって大気に散逸した炭酸ガスですら回収して炭素源のバランスをはかるべきだという時

代が目前にせまっているのである。これは決して化学者の夢でもまた杞憂でもなく、過去の科学文明が残してきた債務に対する当然の返済であるともいえよう。

原子力や最近の分子遺伝学が既にそうであるように、今後の科学や技術は政治や社会と一層深い関わりを持ちつつ、むしろ人類社会の文明・文化に対してますます指導的役割とその責任を果さねばならない時期を迎えるだろう。

さて話かわって、私は昨年9月、理学電機志村工場長の御紹介によって、北京大学・唐教授の招聘を受け長年の希望であった中国訪問の機会を得た。この訪問については別に書く機会もあると思われる。ただこんなに近い外国でありながら、私自身60才を過ぎてやっと訪れたこの国の風物は、正に何もかも想像していたとおりであった。満蒙騎馬民族のもつ壮大なスケールと漢民族伝統の繊細な文化の融合するこの国のどの部分にも日本古来文化の故里を思わせるし、町であう人々のどの顔を見ても外国に居るという気持を忘れさせる。もしこの国が政治的に安定すれば、もう今後の日本は欧米どころではなくなるかも知れない。その地形や人口の関係を考えれば考えるほど、日本なんか中国大陸の一つの省のように見え、またこの日本がよくも二千年間も独立してきたものだと思ってしまう。しかしながら帆船よりなかった時代と九州から一時間余の大陸である現在では違う。この巨大な眠れる虎が目覚めた80年代、政治・経済・学術・文化のすべてにわたって最も近い隣国日本へ差し出す深い友好的交流の手を、かつて戦後30年の日本がなりふりかまわずアメリカ・ヨーロッパに頼り切って今日の近代化を成し遂げたことを思い起こし、快よく受けとめる努力を尽さねばならない。さらに進んで、あらゆる分野でむしろ日本から中国の人々とその技術や頭脳の協力を積極的に求めることも考えなければならないだろう。これらも80年代の日本にとって排けては通れない大きい課題となるであろう。

新春号の巻頭言を頼まれながら本誌にふさわしくもない独言を述べ紙数がつきたが、今や世界の科学推進のため重責の一端を担う理学電機が、この80年代もまた常に眼界を広く、また遠くを見詰めながら確実に前進を続けられることと信じている。

*大阪大学教授、大阪大学蛋白研究所々長